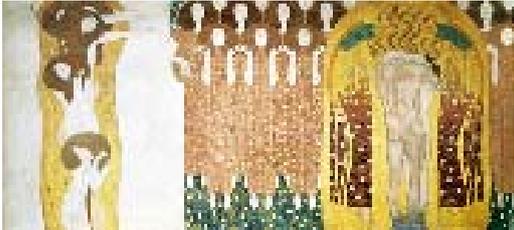


研究者総覧：西川 智之 (NISHIKAWA, Tomoyuki)

氏名	西川 智之 (NISHIKAWA, Tomoyuki)	
職名	教授	
所属講座	国際多元文化専攻ヨーロッパ言語文化講座	
学位（専攻分野）	修士（文学）・北海道大学	
メールアドレス	nishi@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/staff/nishikawa.html	
研究分野	世紀転換期のドイツ語圏の文化・芸術	
	ドイツ文学	
	物語論	
現在の研究テーマ	世紀転換期のドイツ語圏の芸術誌	
所属学会	日本独文学会	
主要著書・論文	「第14回ウィーン分離派展」平成18年～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究 (C)(2) 研究成果報告書『1890年-1930年のドイツ語圏の文化・芸術の解体と融合』2008年3月、53-71頁	
	「芸術により飾られて——分離派結成までのウィーンの芸術運動」『言語文化論集』29巻2号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2008年3月、187-203頁	
	「村上春樹の『海辺のカフカ』」『言語文化研究叢書』第6号（恐怖を読み解く）、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2007年3月、103-126頁	
	「ウィーンの様式主義（後編）——パリとの比較を中心に」『言語文化研究叢書』第5号（日本像を探る）、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2006年3月、63-82頁	
	「ウィーンの様式主義（前編）——1873年ウィーン万国博覧会」『言語文化論集』27巻2号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2006年3月、175-187頁	
自己紹介文	<p>私の世代は「しらけ世代」と呼ばれることがあります。大学に入学したころは、まだ学生運動の名残のようなものがあり、単発的にバリケード封鎖が行われたりしていま</p>	 <p align="center">クリムト作「ベーターヴェンフリーズ」 (ウィーン分離派館)</p>

	<p>したが、「革マル」だ「民青」だと熱くなることもできず、かといって、後の世代のように「ディスコ」で踊りまくるでもなく、サークル活動を謳歌するでもなく、大学の近くの「喫茶店」にたむろしては友人たちとマージャンをやったり酒を飲みに行ったりしてました。ただ、本はたくさん読んでいました。「文学青年」という言葉はほとんど死語になりかけていた時代ではありましたが、何やらわけの分らない作品世界に引かれ、学生の頃は、主に「語り」の観点からフランツ・カフカの作品分析を行っていました。</p> <p>ここ数年は、世紀転換期ドイツ語圏の文化・芸術、特にウィーン分離派について研究をしています。当時のドイツ・オーストリアは、産業化の進展に伴い都市へ人口が流入し、社会が大きく変化した時代で、科学・学問の分野で新たな発見や理論が提唱されただけでなく、文化的・政治的にも様々な運動が起きました。どんな研究も同じかもしれませんが、やればやるほど、これから勉強しなければならないことが出てきます。</p>
<p>受験生へのメッセージ</p>	<p>私自身はそれほど真面目な学生だったとは言えないにしても、人生で一番勉強したのは大学院生の頃でした。研究のためのまとまった時間がなかなか取れない今は、もっと勉強しておけばよかったと後悔していますし、勉強したいだけ勉強できるという大学院生の身分をうらやましく思っています。</p> <p>しかし、博士前期課程の2年あるいは博士後期課程の3年というのは、想像以上に短い期間です。論文を書くには、論文のテーマの背景となっているような基本的な知識がもちろん必要ですが、それだけでは概説書になってしまい、論文とは言えません。2年間あるいは3年間で何ができるのか、しっかりと見極め、計画を立てて研究に取り組むことが大切です。</p> <p>私が指導した、あるいは現在指導している学生は、ドイツ語圏のことでなく、チェコやクロアチアなど中欧地域を研究対象としている学生もおりますし、また、そのテーマも文学や音楽・美術、あるいは民族主義運動や反ナチス抵抗運動など、非常に多岐にわたります。</p> <p>私の所属するヨーロッパ言語文化講座での研究を希望される方は、</p>



ウィーン分離派機関誌
「Ver Sacrum」創刊号表紙

	研究テーマなどについてご相談に応じますので、ご連絡をいただければと思います。
--	--